私立大学図書館協会会長校としての２年間

大野　友和*

はじめに

明治大学図書館は，1999年度・2000年度（1999.4.1〜2001.3.31）の私立大学図書館協会（以下単に「私大図協」という）会長校に就任した。「私大図協」は，全国の420校の私立大学（短期大学を除く）図書館の加盟により構成された大きな組織である。会長は，三枝一雄図書館長で，私どもはその事務局として業務を遂行してきた。事務局の業務は，年に一度の総会の運営, 会長校と東西の部会長校及び監事校2校からなる常任幹事会の運営，東西の理事校（各5校）及び監事校からなる東西合同役員会の運営, その他私大図協の運営全般に関わる各種事業を遂行する役割を担っている。

1999年9月1日に, 九州産業大学で行われた開会式冒頭, 本学の三枝図書館長は会長挨拶の中で次のように本学の決意を表明した。『明治大学図書館はこの4月から私立大学図書館協会の会長校に就任し, 従来からの協会活動の継承と発展ということに鑑みまして会長校としての職責をはたすべく職員と一丸となって微力を尽くしてまいりました。さらに発展を続けるためにも, 皆様方のご協力をお願い致したいということで, 改めてこの席を借りましてお願い申し上げたいと思います』。引き続き行われた総会において私は, 審議事項の提案説明を行ったが, その冒頭に『私どもは, 「私大図協」の, 20世紀から21世紀への橋渡しの役目を務めるのでご支援とご協力をお願いしたい』と挨拶をした。その役割がどこまで果たせたかは

*おおの・ともかず／図書館庶務課長

これから評価されることだと思っている。

ここでは, 明治大学図書館が「私大図協」で果たした役割, 意義などを振り返り, かつ「私大図協」のこれからの展望などを考えてみたい。

私立大学図書館協会の歩み

「私大図協」の歴史を少し紐解いてみよう。「私大図協」の歴史については, 私立大学図書館協会五十年史 [1] に詳しいが, 前身の東京私立大学図書館協議会が昭和5 年6月に成立したことに始まる。爾来70年の歴史を刻んだ伝統あるものである。前身の「東京私立大学図書館協議会」の発足にあたっては, 明治大学は中心的な役割を果たしていた。つまり, 「昭和5年6月16日, 早稲田大学図書館林癸未夫（館長）, 法政大学図書館天晶寿（司書）, 明治大学図書館森本謙蔵（司書長）は連名で, 冒頭に次のようにしたためた招請状を慶応義塾, 國學院, 専修, 拓殖, 東洋, 中央, 日本, 立教の各大学に送付した。『さて, 突然ではありますが, 此度私共に於いて在東京私立大学図書館の関係者が時々集まりまして館務其他関係ある事項につき遠慮なく話し合ひ学校図書館の本来の目的に向かって協力して進み行く様に致したいと思い立ちました。』この勧誘に國學院を除く各大学が応じ, 6月28日早稲田大学図書館に参集し, ここに東京私立大学図書館協議会が成立する運びとなった。」 [2] とある。昭和5年には, わずか10大学図書館からのスタートであった。森本謙蔵本学図書館元司書長は協議会の事務局長として活躍したが, 前掲五十年史によると, 森本元司書長が, 東京私立大学図書館協議会の発足や発展に献身的に尽力されたことがうかがえるのである。

その後, 昭和13年に関西地区の3大学が加盟し, 「全国私立大学図書館協議会」へと発展し, 戦況が厳しい中, 昭和18年5月中央大学での第6回総会において「私立大学図書館協会」がスタートしたのである。当時の「私大図協」加盟校は23大学図書館であった。戦中においては「活動は困難を極め」, 「会合を催すことは容易ではなかった」 [3] と記されている。また, 「昭和19年に入ってからは, 戦禍は厳しく, 総会を実施することはほとんど絶望となった。」 [4] ということである。戦後においても必ずしも順

風満帆ではなかったが, 私立大学図書館関係者の献身的な努力で, 1988年には50周年記念事業が組まれたことは記憶に新しいところである。本年（2000年度）, 本学が主宰して開催した総会研究大会は, 専修大学で行ったが, 第61回目を数えるものであった。

私立大学図書館協会と明治大学との関わり

次に, わが明治大学図書館はどのように「私大図協」と関わりを持ってきたのかを見てみよう。この度の会長校就任は, 1983・1984年度以来（当時の図書館長は山崎賢一法学部教授）の会長校（当時は「常任理事校」と称していた）就任である。また, 1991年には明治大学を会場に「私大図協」東地区部会総会を開催した。

明治大学図書館としては, これまで「私大図協」東地区部会において, 研修委員会, 研究部会, 研究分科会等で多くの館員が積極的に参加し, その中心的な役割を果たした図書館員がたくさんいたが, 全国レベルでの目立った動きは多くはなかった。私の手元には, 過去三十年間の「歴代役員校並びに部会等会場一覧」があるが, 他の大手大学の「私大図協」との関わりと較べて明らかである。その意味では, 今回の会長校就任は大きな意義があるものと思われる。

会長校就任後の歩み

明治大学図書館は, 今般「私大図協」会長校として何を目標にしてきたのかを見てみよう。私たちは, 会長校として「私大図協」の活性化と組織の拡大, 加えて「私大図協」の組織改革を目標とした。「図書館の改善発展」は「私大図協」規約にある目的である。更に, 私立大学図書館全体の振興と社会的使命を果たすためには, 厳しい環境の中にあって, 結束して組織の維持充実を図らなければ社会的使命を果たすことができないと考え, 組織の活性化と組織の拡大をもうひとつの目標とした。会長校としての初年度である1999年度「私大図協」総会（於九州産業大学）において, 従来の事業計画に加えて以下のような事業計画を新たに掲げた。それは, ①「私

大図協」ホームページの開設, ②組織の拡大, である。ホームページの開設は, 加盟館相互のコミュニケーションや情報開示等に必須であり早急に開設する必要があることからの提案であった。

以下会長校就任後に行ってきた事業の中からいくつかを紹介してみたい。

(1) 協会ホームページの立ち上げ

私たちの提案は, 幸い総会で満場一致で承認されスムーズな事業計画のスタートを切ることができた。ホームページの開設については, まずホームページ開設準備委員会を組織し, 開設に向けての準備が始まった。ホームページ開設準備委員会（委員長　三井悟氏:東海大学）は, 精力的にその役割を果たし, 準備作業を整えた。2000年度に入り私立大学図書館協会ホームページ委員会を発足させ, 委員長には引き続き東海大学三井氏にお願いし, 継続的に作業を続けていただいた。2000年6月には私大図協ホームページ開設の運びとなり, 現在は順調な運用を行っているところである。

(2) 組織拡大の動き

国立, 公立が100パーセントの組織率なのに対して, 私立大学は90パーセントそこそこであり, 組織の拡大は「私大図協」の活性化には是非必要と考えた。組織の拡大は, 東西の部会長校（東地区:成城大学, 西地区:佛教大学）と連携して必要な資料を作成し未加盟校に送付した。その甲斐あってか, 1999年度には9大学, 2000年度においては19大学の新規加入があった。それでも2000年度は新設大学が多くあったために, 現在も組織率は90パーセント前後を推移しているところである。今後更に組織拡大に向けた努力をして, 国立・公立並に全私立大学図書館加盟を実現したい。

(3) 組織の活性化と前例主義の排除をめざして

もうひとつの活動目標は, 組織改革であった。具体的には, 永年当協会にある1, 2の有力校への依存体質を改めたいことであった。もちろん私大図協の加盟校の中には早稲田大学, 慶應義塾大学のように100名近くの専任職員のいる図書館もあれば, 図書館員が1人という零細な大学図書館も存在する。多くは10人程度の図書館員である。このような現実の中で, これまで有力校に何事も頼るという風潮があったことは, ある面ではうなずける事ではある。しかし, 私大図協としての重要なポイント, たとえば国

公私立大学との連携窓口の役割や常設委員会委員長ポストを独占すること, あるいは様々な不文律の中での少数有力校の支配傾向については, 是正しなければならないと考えた。過度な有力校への依存体質は, 個々の加盟校, あるいは役員校の実力伸長の妨げとなりかねないし, 自由闊達な協会運営に良い影響を与えないと考えたのである。

しかし, 永年の習慣, 良く言えば文化を崩す事は困難だった。「私大図協」には「規約集」というものが公にされているが, それ以外に会長校あるいは役員校に引き継がれる様々な「申し合わせ事項」あるいは不文律の慣習なるものがある。これらのひとつひとつが結果的には, 「有力校」に「お願いします」という依存体質になっているのである。

これらの中から, 特に変革が必要と思われる事項, あるいは委員会の構成等の「申し合わせ」は, 役員会に諮ってそれを変更し, 具体的な改善を図った。

（4）その他の活動

① 国立情報学研究所（旧学術情報センター）と「私大図協」の懇談会

全国406私立大学図書館が参加（2000年11月30日現在）しているNACSISシステムを運営している国立情報学研究所と, 「私大図協」の間で初めて懇談会を開催し, 意見交換, 各種要望を行った。そのなかでも, NACSIS-CATの運用時間延長要望を行い, これが実現できた。また, 定期的開催を要望し双方でこれを確認した。

②「自己点検評価手法ガイドライン」の発行

前期役員会時代の産物であるが, 「私立大学図書館　自己点検評価手法ガイドライン」を編集印刷し, 全加盟図書館に配布した。

③エルゼビアサイエンス社雑誌価格問題への対応

私大図協が民間会社の雑誌価格に大きく関わったのは始めてのことではないだろうか。この件は, オランダに本社があるエルゼビアサイエンス社が発行する雑誌約1200タイトルについて2000年契約分から従来の慣行を破って, 1）日本の購読者には円価格でのみ販売する。ドルやユーロでの販売は認めない。, 2）円とギルダーとの交換レートは, 1ギルダー67円とするというものであった。1ギルダーが67円というレートは, 1998年の円安が大きく進行した当時のもので, 不当なレート設定であった。（ちなみ

に, 2000年10月上期は1ギルダー=42〜44円を推移した。）

この措置に対し, 1）については, 並行輸入を認めないということが独占禁止法違反の疑いがあること, 2）は為替レートの設定が, あまりにも現状とかけ離れたもので不当であることなどを理由に, エルゼビア・サイエンス東京支社と話し合いを持ち, 更にオランダ本社への要望書, 抗議文を送付した。その後, 全く同様の抗議行動をとっていた日本医学図書館協会, 日本薬学図書館協議会と連携し協議を重ね, 2000年6月には, 3団体合同で「外国雑誌の価格問題を考えるシンポジウム」を開催した。シンポジウムは180名ほどの参加者があり成功裡に終了した。エルゼビア・サイエンス社との数次の話し合いを経ても, 際立った成果は得られておらず, この問題は未解決である。この種の課題について「私大図協」独自であるいは関連諸団体との連携しての共同歩調をとって行動したことを私たちは大きな財産としたい。

④「図書館総合展（Library Fair)」と「私大図協」主催セミナーの開催

1999年, （株）ジャパンカルチャーセンター（JCC）を主体とする図書館総合展運営委員会は, 東京国際フォーラムで第1回図書館総合展を開催した。そこで「私大図協」主催フォーラムを開催した。講師は京都精華大学の藤岡昭治氏で, 「情報館の経営戦略：潜在的な顧客を集める舞台装置」について講演いただき好評を博した。2000年11月に第2回図書館総合展が開催され, 前年同様「私大図協」主催セミナーを開催し本学図書館庶務課の久保木和義氏が, 「新たな図書館国際協力—韓国・翰林大学への目録作成支援—」の講演を行い前年同様良い評価をえることができた。

⑤ 年号表記の統一

「私大図協」には関係機関から様々な資料が集まるが, その中の年号標記が元号, 西暦あるいはその双方標記と混乱していた。私共が会長校に就任したのを契機に統一化を図るため役員と協議し, 今後は原則西暦のみの標記にすることとした。

⑥ 協会資料の整理

私共が会長校に就任してから, 前々会長校である慶應義塾大学から40数箱のダンボールに入ったおびただしい私大図協資料が届いた。そのなかには, 過去の会議資料, 会報のバックナンバー, 永年勤続者の履歴書など様々

な資料がぎっしり詰まったものであった。歴史的資料は「私大図協」の歴史を紐解く際に必要であろうが, 当然破棄してしかるべき資料もたくさんあった。バックナンバーも何十部と保存してある号もあり, これは原則5部保存で他は破棄, 履歴書は個人情報であり, 使用が終わったものはすべてシュレッダーで破棄した。古い領収書の原本なども同様とした。

このような大量な資料は常設の事務局が完備されている場合は別であるが, そうでない場合は, 引き受けた大学でもこまることであり, 一定の基準を設けてスリムなものとしなければならない。

大学図書館を取り巻く状況

会長校就任から1年半が経過した。そこでの様々な体験から, 私は「社会は確実に変化している」, 「時代は動いている」ということを実感した。日常に埋没して大きな流れを洞察できなければ, その組織は消滅する運命をたどることになるだろう。社会の動きを敏感に感じ取り, それに適切に対処できなければ, その組織はティラノザウルスの如き運命をたどるであろう。もちろん, 大学の理念・建学の精神は変わらないものとして堅持すべきであろうが。

もう一つ実感したことは, 「みんなが良くなることを考えなければならない」ということである。一握りの有力校だけが優れていても状況は変わらず, 構造的な発展も見られない, と感じた。お互いに協力して教育水準の向上を図る必要性を実感した。まさに, 大学及び大学図書館の発展は, 直接研究や学習の向上という成果に直結するし, それは幅広い構造のなかで醸成されるもので, 象牙の塔では育たないことはすでに歴史が明らかにしているところであろう。

また, 1年半に渡り「私大図協」事務局を担当する中で, 多くの人々との出会いがあった。国立・公立・私立の大学図書館関係者, 出版社・書店の方々, 図書館システムを担当するコンピューターメーカーの方々である。これらの方々との出会い, 語り合いのなかから, 大学図書館を取り巻く厳しい状況を垣間見ることが出来た。そのなかからいくつか話題を拾ってみる。

(1) 図書館員がいなくなる

大学図書館とりわけ私立大学図書館において, 多くのベテラン図書館員が図書館を離れている状況がある。かつて, 個々の大学図書館には生き字引といわれるような優秀な人が居たものであるが, 大学の人事行政の一環でどんどん図書館から学内の他部署に異動している。背に腹は代えられない, ということであろうが大学図書館界リーダー的存在の人も図書館を離れている現状は, ある意味で図書館の危機である。

(2) 若い世代の図書館員

図書館員になりたいという人がいても, 様々な偶然が重ならない限り図書館員にはなれない。それが現実である。大学, あるいは図書館で図書館員を新規に採用するという制度が確立していないからである。図書館を良くするために最も必要なことは, 優秀な人材を獲得することである。図書館が主体的に人材を採用することが困難ならば, 図書館に居る人材を育てる必要がある。図書館は, 立派な施設でも豊富な資料でもなく人材である。一方, 長く図書館に定着することによる弊害は巷間言われることであり, 充分に留意しなければならない点ではある。

「私大図協」の活動のなかで出会った加盟大学図書館には, 多くの活力溢れる若い図書館員が居た。彼らが今後大きく育つことにより, 私立大学図書館の将来に大きな夢を持つことが出きるのではないだろうか。この間の様々な出合いのなかから, そのような確信を持つことが出来た。

(3) 図書館資料の多様化

「私大図協」総会があると必ず関連企業の展示会が併行して催される。業者は30〜40 社が参加するが, 多くは「デジタル」資料である。図書館をパソコンが席巻している。逆に紙媒体資料, つまり「本」屋さんに元気が無い。活字離れ, 学生が読書しないと言われ, 追い討ちをかけるような不況のため, 出版社に活気が見られないのは残念なことである。

ところで, 図書館には, たくさんの図書以外の資料が入ってくる。デジタル化資料の扱い, 提供方法, 管理方法, あるいは課金の話など, これから早急に対応しなければならない課題が山積している。大学図書館及び図書館員を取り巻く状況は大変である。

おわりに

私たちの「私大図協」での取組みは,「私大図協」が果たしてきた様々な伝統を継承し, 更に発展させることの営みであった。加えて組織をより強固にして, 様々な事象に敏感に対応できる体制を整えることであった。一方, 学内的には全国的な組織の元締めをこなすことによって, 誇りと自信を持ち, 図書館に元気をもたらそうとしたのであった。“元気” のある図書館こそが, 組織を活性化させ, 図書館の本来の目的遂行に前向きに対応できるものと考えたからである。

つまり, 研究・教育成果の向上のためには, 優れた図書館サービスの提供が必須なことであり, 訓練された優秀な図書館員を育てる環境・土壌を作り出そうと考えたのである。その心積もりがどれだけ実を結んだかは, にわかには判断できないが, そのための萌芽は少しずつ見えてきたように感ずるのは, 私のひいき目であろうか。

残された任期はあと4ヶ月余であるが, 2001年〜2002年度は監事校という立場で役員校に就任する。また, 2001年度「私大図協」総会・研究大会は, 2001年8月本学リバティタワー及び新・中央図書館で行われる。またまた大きな任務を担うことになるわけであるが, 本学図書館は継続して「私大図協」発展のために一翼を担うことになる。私どもの努力が, 合せて本学図書館発展に寄与できるのならばそれは大きな喜びである。

最後に、事務局業務を2年間共に担ってきた折戸晶子さんに感謝の意を表したい。また、嘱託の岡田明大君の努力に感謝する。

参考文献

[1] 私立大学図書館協会五十年史　本文篇　平成5年3月発行
私立大学図書館協会史編集委員会編

[2] 前掲書　P.1

[3] 前掲書　P.7

[4] 前掲書　P.7